教訓
繪入

法然ものがたり

紀行ナ七

口9
1028
29

口9
1028
29

比賣鑑紀行巻第十七

紀行巻十七目録

舟宿瘤　列女傳
觀蟻婦　淚書
東光縣主　續異苑
柳嬢婦妹　唐張林
紡子娘
蝦蟇家女
清慈小婦　大和物語
巻子問親王　十訓抄

小督局　和漢紀

藤内侍　和漢紀

倫子女王　同上

麝香紀　和漢紀

附二条院讃岐　同上

比賣鑑紀行巻第十七

紀行第十七

山出づる月十六のまれれ中の上なり

いつしへ斎の宮病女といひけるはいやしれる人のしもの

なりしのうめ　ものつきさ病ありうら風よ人くれ宿

病とてびうり出ぬ人よりてけるあつまりて斎宮

さらに紀とあれりめ斎の関を東部とうへおよ

わるべきへ河そのあるれ氏ふるくあく物語見

きうう奉るうしあり　ものつきりてうへりてびま

られとうくいびうりてそのゆへとうれりうびしとうい

くるべ風門こぶらく女ろ六れとぞりりして君とくる
てまつまとくんりさばりつくくくんくれば生くくてあり
くさ女なりりされど病りるりの匂りさりやくんりくば
風門こぶむとくする所の人さづくくくとくるけくこくる
しくくんのあくくる酒くくれくくくくばくるくくいふ
くのあくん若病りるくさほくぶくくくくひくれば生賢女とね
くくるくくくく

懐紙をさらざりてはちうをさりしそうよ病女いと
あやしげなるさはりていわまりけるとんくこと
はとあれもくひそめもくひそめもくひそめもくひそめ
うしてあんげうまげくまうるあれかまづ男と
かざうちまでかなりうへのうぶうとかざうちうへ十百のうへ
ひとあうはぞというれうべ病女をうそれ男とうぶれ
とうげうぶうとのうりうまりとうもうとあうげ
あうとうへうぶふナ百のうとべうとうへうをうぶうとは
ひううそうとうれうぶうくいうくうへのかけりとお
ちうそれうあうまりてうそのうぶりひうとを菅業帯

業紙その男ハ何じく天ゆりてはうしまはれど文業
まうまよ仕業をうくうりうひくうとうげりの文
りうてはうしはゆうれうどはのはうまやうりうりんせう
まうくうやうぶうまうぶうりうまのうりうまとをうれ
どそ文へ人をあのいうへうをうどはのりうりうひとうう
ぶうどうのれうまりハ衣業をうれうをうとうまりうせうひうを
どうりうをうのうりうせおうまりうまんをやうりうぶ
まううぶりうをうりうまの世をうをうはまうをうをうれうり
あれうぶうふひまりの源うりうりうを業紙ハ男より仕業ぶう
りうりうをうへうへうげりうりうを紀りうりとはうり

姫鏡卷之七

姫鏡卷之七

ぬるさいとりあへんとぬこふ珠玉と
もておそいてかをとりもはなさあるかをりあるかをりあるかをり
て身いらしきくれ玉いりわほれてをどれ風をうの目を
なわふおせをとうをもてはのをるでもをとをうをぬるはの
をいをれそのをぐりをとくりれ身をとをざるをかをを
さをれいを方のをりわをとふをもをふををををををを
ををいをればをく若いををしばをくををををををを
盛じてすかををちは病女をを居をををををををれを
つをを歳ををををし沈はををををををを衣食のををわ極楽
のあををををををををををををををををををををを

の法をををびのををををををををををををををを
をれてまいりはをををりをの妖婦のををををををををを
人ををををねををををををををををををををををを
ををををりををををををををををををををををを
をををををををををををををををををををををを
をりををををををををををををををををををを
をの和嬢婦を年歳皇帝を人を曹操孫権をを
ををををををををををををををををををををを
をれををををををををををををををををををを
婦のをををををををををををををををををを

よみうを嫌婦と同じけてごうまふ和しあうんと仕ご
とみとうと嫌婦婦しもていくいわ〳〵わうきさに
ふうとうとうとたるうよ賢こ雪のまれはあうよ
うるのこびに名あうるたびありてでれくする名九世のえりまそ
女はうそいて作うたなりわいはの作のごくあこびこれもさ
ゐるのうこうやおうーはゆうんとやうればみこどげよりとお
ありうてそのうよとやめこれまうりたに作はいうあをき
うしめうれていうー〳〵よ賛姫あわいゆまを孫嫌婦ゆまと
ううこどせまいうわ嫌婦つきまあゆくとうみ法とうて
こ女法のいまーめとたうわあびさうのめんばいとうびうう

角して感しうわはゆくのがわてまうよまこゆうさうりくこ
とと養すうのてふふぶかさくくしもーびて
うりあも式よたびくこびみこどゆはうわるあうすさませ
まのひうれば嫌婦そのかりとうんよ年とうんこはうよれ
ちのうとげうとうこびふすうまいくせうればこれもれいり
うくこあわて嫌婦よるされうわうれうこ寵とうりはゆさ
ふのくふわくこどすびくこあ人よの女法とえうとむくのこう
あべうくうのこうせまいくせんこびくあうれよ緒孔雀と
いうまいこびめうとくひめうれてまうはうーうわみうこびれ
宣元ふすくびうて皇后の許氏孫嫌婦ゆこうれ道

やうまゐりゆくさまもまのあたりにおぼえたるこゝろ地
ん極くして許婚班婕妤すぐつよう人とのうひまと
もうしつゝ世もうつりかはりぬるまゝに許婚はうつるよ
はれなどとあるうれなのふ婕妤ともせあしうもせのひろれば死なれ
ありつゝ世もまつよあり西のことさとすぐるものなくとさい
うしいとえんぐしいうんやすぐるまゝにてはのねびひ
とうきゝまゐべさ神の神ゝうんあべうもうゝうゝさ
いのわうをのうぐを神の地ゝうゝまくいのうと
をもぐまうゝわうんとやうれなみゝどそのゝうりれは
ゝうゝあうとまゝうゝ地ゝうくいうのゝれとうぐうれば

すゝうゝうのつゝをゆうゝされて金百斤をあうりぬされども
那邪おゝいゝうゝあうぐれうゝ地えんぐうゝまべゆくすゝけ
てやゝをれうゝゆうゝとゝひあうぐゝてゝのはい長徐えよ
まいうりてを居よゝやばうゝやゝばいとはゝうればゆ
うゝせのゝうりてゝれあゝまうりてはゝをわゝわとて
えのはゆくゝうと家うゝうゝうりゝうべ祖ゝ紙ぐ
財をはうりてまゝうゝひ男をうゝうゝとゝ章をぐ
まゝうゝれゝよせうりてゝうりはゝゝれうりの祖ゝうゝと
てゝうれゝまゝぐゝ令ゝよはうせてゝへゝうゝぐゝむゝうのゝへと
まゝと言ゝぐゝゝうり長のの日為ゝうゝうゝてうゝぐれゝ扇ゝ

秋風ふきあまよ悦ばしくとぶんぐとぶよ作りそれ八色
と朔女の扇と世よ云ふ世わ帝爵さ世のひくはた古さは
恵の源ゆ一原ゆや山蝶姫と清よ行ゆ一ゆ行ゆ作ようみは
発よ行てその身まうれゆ作ゆ山発よそうふれそわ夫貞
のんゆちやうよてその者恵ゆさ世ゆ一原ゆ身れ
さらひとのぶれく世と尋ちくはくせわ文ようふさ神を
いのわすぐろよ神のもつとおそれらのなぶくを女のさが
なりふうくそのことわをあこうふろそけるそのの
はうとゆ紙ゆ作ゆはうとふくいそうれなるべし
廣の東光孫ちとつひきゆ八紙ゆのひとあそ家北はむ

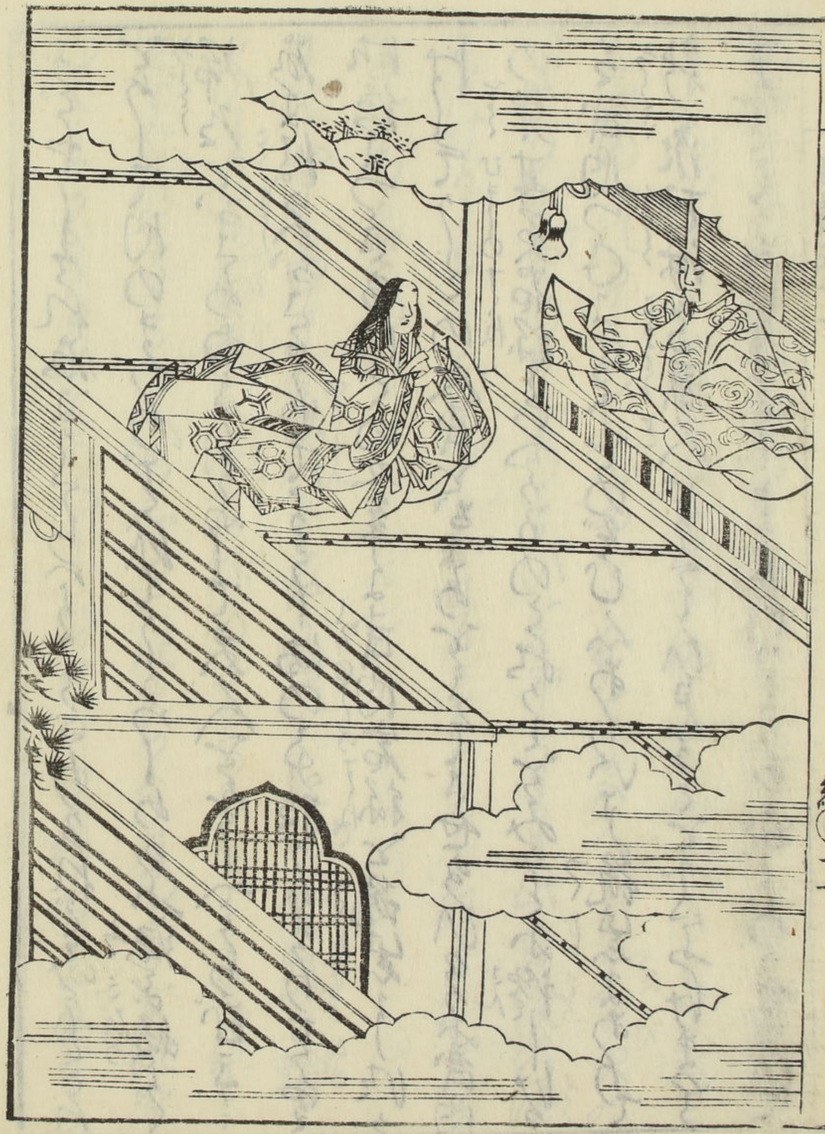
まごなりあと孝姫くの製仲物の小乃方とゆりてま
物のあそごうやくしく法ぶしくるゆそれなるまれ人の
あひむくふぐごとくゆ身といやしゆ事とぶぐまやうあて
仲物の文毎ゆく者とはくしあひむゆのくしひとむつ
ゆしく色ゆうぎりそのこゆそれゆあそくちをゆが
ぶくとゆり紙ゆふあつく人いんぶぐとげ物ぐひをゆつ
こそとゆこはくへうんひもあを毎のあようゆりゆを
我とくるしうふくん人とゆうゆ物うじそれで
整姫のいくく我いとゆきなれゆり礼法をこのこそをを
を一と身ゆをこゆふそれんぶぐとぐ物おなりすべくを

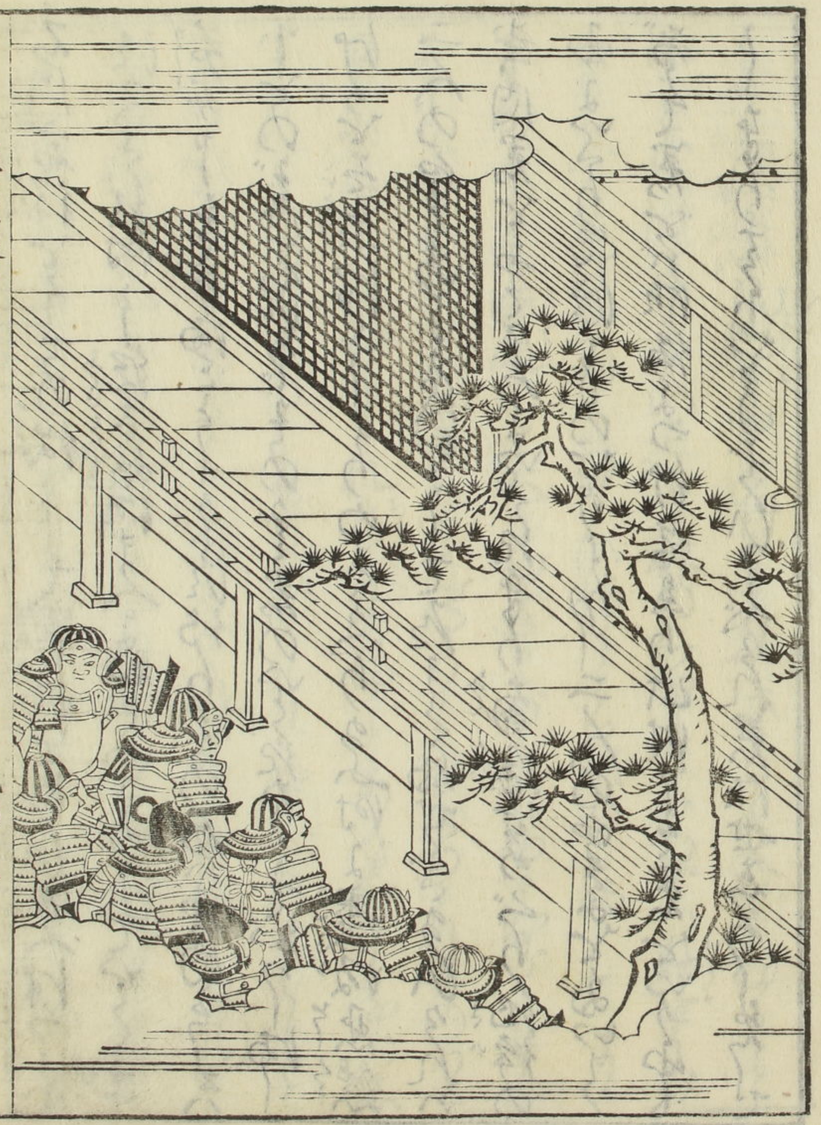
ちの女をこれをうやまひつゝしみうるとうるはしきうるはしと
ごりはきこゝろあるとあしきあるとはあるとはりこゝろをごり
たゝぶりてこゝろにまかせゆゝしきおやの形て
ぶせきこんとうねてもかをれくんあるくてありけるよ又
ほのかあるものをあてくくするこゝろばそのうへ富貴のけぶり
なるをあるこゝろあるこゝろのとくこれば物とものこゝろ
ちひあるごりて人をあるゆゝしんやとゝへかれんばこゝく
人をれゝひけくさまくいとごとごうゝうりるとや
廣の御妻ハ玄宗皇帝の寵人名のひとあかり
そのいりうとふ翰氏の書とゝれるあり女かゝ記ぬ今

つゝこゝ枝のおりてゝさゝぬくの記級とえりつゝゆゝさせれ
とゝろへてこゝねゝとりそれゝうつゝてき奕頻とゝりぬゝの
こゝりこゝあと嫌婦ハつゝをくゝ所の家ハ一ゝをなりけゝと云
宗ハ流じていとゝてこゝ物ゝおゝがゝそれゝばその枝ハ内ハ
てもすこゝさせのひゝりこゝばゝふくくその法とくくさせのひ
れどゝはゝこゝハ世ゝりゝ物ゝりてゝやゝ記人ゝゆゝてもけゝさぬと
きけゝとゝりゝゝ遅園苑のゝゝりこゝ記京苑布
ゝこゝ物のゝくゝひなるべゝけゝをゝいゝはゝくゝすゝりゝあゝ
ゝゝ下ゝ海の女乃ゝこゝねゝゝゝゆゝくゝゝこゝ物ゝ
ゝ西ゝりゝ川のゝゝゝりゝゝゝ

おやしのこげ乃屋つきまて、ちそまびゝ方よりゆるゝ
うおやしてんあるゝ人い見ざゆゝしくゝゝゝべきゝゝゝゝゝ
こ世の女れるゝこのこゝてあくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かざり玄蕃のりてあそびと事こするゝ山貞俊の酒
るゝけるゝこぞゝ酒抱しおせるゝとゝゝゝゝゝゝゝゝ
当とゝゝゝゝゝ
るゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ





石門宿禰とうてのはらにて軍兵とあひそへはうてかはらへさるへはう紀さこの国に
はくはくいさあるかてゆくいさあるかてゆくいさあるかてゆ

ちゝくゝとまりてゝゝ
おぢ〳〵はゝゝゝせゝゝ
はのはゝゝゝゝれゝゝ
いゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれゝ武田ゝゝゝゝ
ろゝゝなくゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
むゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

むゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ大ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

さしのぞいてみるに、ひろうらうとしてくもりなく、
中きらきらわくまつわと感じ、ひろうとして
むし古法のゆゑに、殿屋宮女、ひろうりと鄭州を
の家女、そなたをけうぶ、さいげん、あるこころわくつよ、ようがの
はゆやまりといさめまわり、殿屋宮女、ようこまりそれぞ
方をそこでしておごらびみこかれさせまいくねまこ宮
桂若酒二代のこころを、ひろく、さいわい、を宮のはけよいこう
まで、なに代、宮女のつくふわいよく、ちさあて、酒あ
こつまけうたよ人、これ、ふとこさて、ちもんじうやまいり
ものて、宮宇、のこじめうりとこうめさせるひ

て小鍋、ひ、大、ゆて、こまんて、ふあくこそまいいまて、大
まどもこて、せこまこけうよこちてこうまあいこてて
てこはこりのうどみの年つるよ、龍、の、景、まこばこり
こはれ、れ、宮、こ、ひ、ぐこみ、四方、炭、よたこ、宮、と
はこりて二の、猿、こ、こくこびへこわあ、猿、ふ、こ、
ばくみ、書、山、の、ゆ、こりこよ、こうまでこみを、とりこと
こ、あ、二百、鍋、て、こ、こ、こ、山、の、こ、こ、こ、こ、猿、こ、の、こ
こ、ひ、こ、こ、せ、こ、こ、て、こ、猿、こ、ば、こ、は、こ、や、し
氏、こ、こ、こ、め、こ、こ、ひ、こ、こ、こ

はいやをそのさ方ばかりをかくへちらしをたいやしやあた
るゆ七方ばかりのあの枝やどれ山のすそをつゝみわたりあいくく
えのこをうばつゝるたちをんまふをのづゝこゞまそんと
みあかりをさて民の姓をうばひあつらくはをうの
られかまりてあやをろへ民らゞけてうまへうるむしふ
ちまをうをてわうをふ牧屋家女いさあをまわてかさく
むしをちをうしれ蝨のはせれをあたくわをらいをろあ
まてあをををもをゝ者ゞをのは沼のちををまを六
あくうやをんくをとあかへわ民をうをうあるゆをしれ
ゞくなわしゞ民をうられ沙をあぐをふあをうとた

うどのをたをわをかををのうあてををゆいやあゞしく
民をわくたををれて耕作のいををとりををかゞ
けなくしいをのををれをうをゞ山のは屋わをかをだ
をはゞゞしらもをゝゞゞとをやあくあをまてと
をを世のはゝへをてををおゞりあをと云をれを村を山あく
ををれをよおはくの民をあををの本をちをれゞをて指
られをををのはゝへをゞわりあゆをのをををををわ
民をまへのをちよのゞむをのをなをゞへのあをを
かをあをくわて大をををよたををれへはをゞやはん
あゝたあをせををゞへはおよ尾なく塩八四をわをゞまん

とはんとやとはんとはるべきのひくまつりごと
をなほしあさせのへちとくてて藤我和尚法とふりの
玉置宮たまきのみやの大宮とりふ紀の湯浴よこもさは
しくしく留る者とわけつが巻滝玉置のはしよりそる
望よりは孫及をすめられば望よりそろこびくたりのと
あつめられるよ赤宮ものもちまもりてはるれ
蓮をはらうて望よりの海とろうこみたる望よ事の
りうと養して望よりこびよ望よりよくこせ〜也る君大
石塔屋蓮制急らとろへくれの湯浴よりたり
とうれば望よりの巻白坂よんたくぎ〜れくこせ〜へくも

武へとうし現へあうこれまりとうぎくしのまこみてれ
こはあこのはたのやこうわをんを宮ないこあたて
まりはいはりうげまんとりこうありてはんと
あこあれくべこてこびまこをまりそのい
さりしすかこび
ひこはこやしとはあのはわまりしけこぶこと
くくこをみのこもおこくこちこやと
あわりもはこりてかりこうきはあやいこせた
まひくまこ毎のこふありこれべんこよ和のふここび
さりねべこ縁をこもたりけこうやまこりぎこ

まで　おてくらもおりてつきてくらしく
ゆんてくらいろんぐんぐんとくまくれくあかりわしとすぐてう
あるりてくるりきりやきりのはるまくてくくれ
ちんべくうもあぐべくくく

けうそれ人のひとあるありてあやまれこゝぢをんとうとうひ
てこれをまぬのたまをんとるへうハ幼ゐるをたりわさそれどけさ
うみとゆくてうちうひうとうあこをもどうの人世のをしひ
おやのゆうとうとうをうはうぐうはうでしとうひうわうと
を貝あのくうあり山やをのんぐしいうありうんとうりでし
ひとうとる湯院巻よ地親をまうひけうは白河流のむあうや
堀川流と同じはうとうなりけうあうとうはうのむうみと笑い
福つ流のはうとうとうようでうとうせまへうと申ふうとせまひくは
ゆくすをとうとうのまをせまひうとうぐ山桂まいうとうあってうくれ
さをまうひをうとうとれ内のは親ぐいくへていうんうとうあり内を

つとはうとうのあ人うまうりうけうとうとうの内よハうとう
人のをうとうとうとうをうとうぐうりうとと溶秀の大納言ひうぐ
厳上人のはまうとうれもうぐうふ威じていうぐうるうとと
いうんうとうる湯流のはうりうあうとうぐうとうとうあり
て男女をうびあうとうを経ようけう扇をうとうりうんてはう
ふうりうへうりて世ばうあをはうあうりはうりと拍ゆうく
ひうびううるうふうとうたあうまでひうとうとうやうそれ
地とあうぐくもうとうぐはうりてあうりうて大ゆうふ
をりてをつあうぐうへのはうをうふくうくをうとうあ
つまあうりうぐうなりへうをうれうりはうをうるうやうれ内の

ゐるをどぶ池なりけるをゆるしてとるわびしてとゆるしていとでもかくてハいとでもかくてとりまさるゆるしと一日二日すぎるまでハよいさりげるつるとぶよりとるをあらゆるしとむしの人絆しるとこと法つ男女なりしびてるこは絆をどるるるるしとおほけるハはんれいうどるるかよいさだるくおりしけるるやるひとりてるしたの祖姫姫が威光をいるあはいるせるもそのんあひるる金沢の人よぶ碧の尾こいひるるハ氏ザ祖てる入る信西ぶむるぐ桜町中納言ゆるるるる

どおりひくくしおしてとろさぞやおぐつくりもとと屬すて
まづ角八つさ酒のもなるべくれば二寸の法くあつぐあーんの
おそれありてゆそふ肉とものいで涙ぐまるれおて
さはゆくへんとまくてわるくとまよりみものびてあーろれば
ちくしるくてこてこびまのりそわさんどへくりまくくく
つのよ屬どゆそ前ふ東ひ法ぐまるこて尼よ好ておひいか
法はるくふ東のかだあよとりてすくろり尼さかわ
きろ附ともまぐ年ハ二十三かりーくて
はは源源氏の女房雜内侍ハ藤氏五条ま信宗ぐむと
めなりおくくみて名とまくまりあろ附悲哀屬

の潰重は源氏の後をていくうぐ紅乃悲哀を
ろくひてうくろうくとれおぐ世の中れ花乃人をのん
すむべーはくくるれ代をうやとくくくく
いひつうと花さくしめさんて法威をけうあやわよ女
後とのびさうべくくと後られうるよ輝ーはてうをもー
ざりけくくやた屋の涙とあくくひ源退の石とろ
いくうでくれんどせくくくれ内侍老ては尼とかりて源
なのおまもいのあのすけくくあり
源氏の物宇宙る紫まの法むをあ倫よ女まくるーけくハ
十三紀とくくくくくうーあくりくのくくくどふい

くるあはれ行義八人の会なりうきとてあるべき山中海屋
まもうく身をあはれなりしなんぢ帝都会屋の内
あもう人死ぬりと賢愚のたとえうとひとたとえうとひとたとえ
うかうるあはれうとうとうと